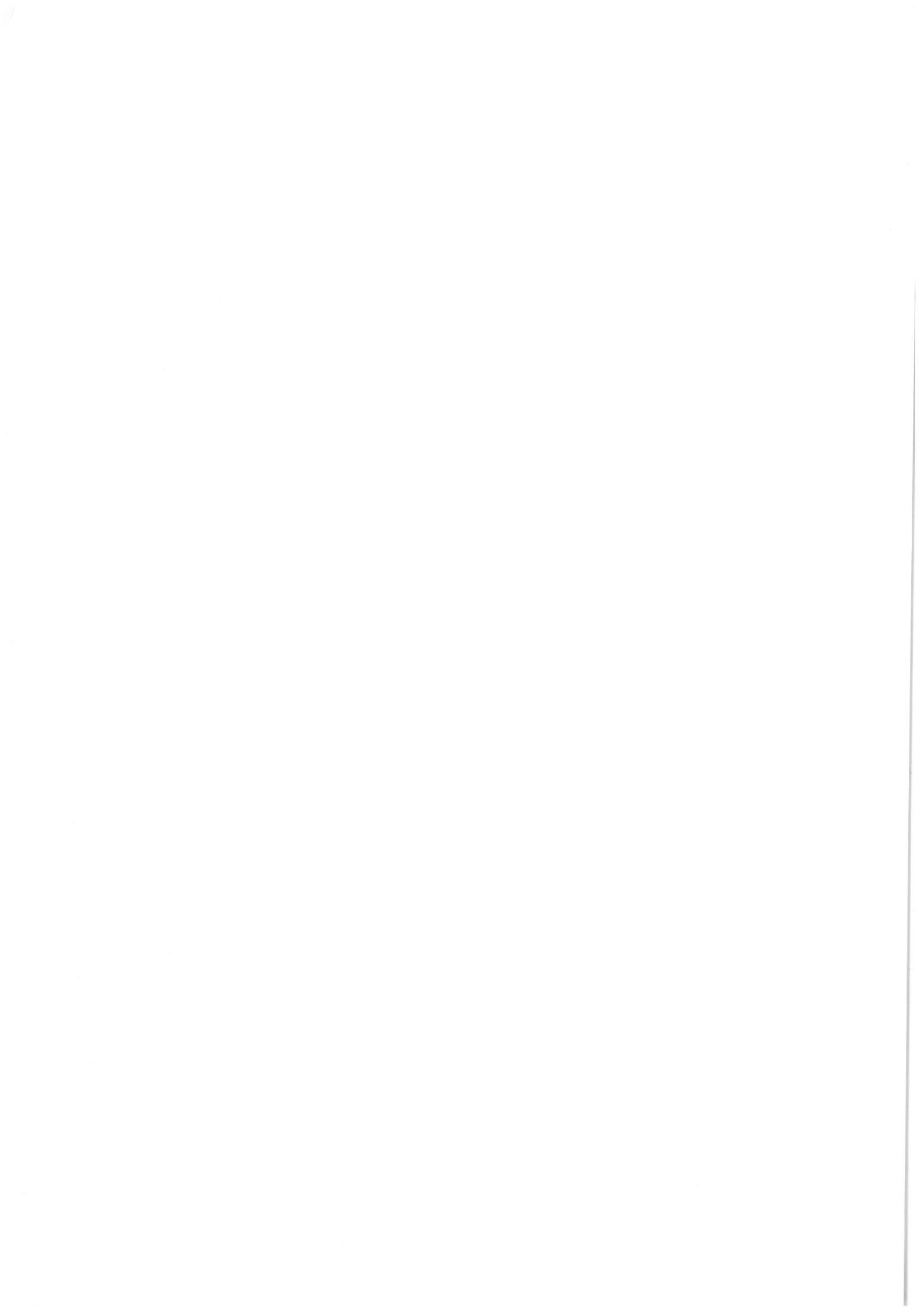


宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第61集

広野廃寺発掘調査報告書

2006

宇治市教育委員会



宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第61集

広野廃寺発掘調査報告書

2006

宇治市教育委員会

序

宇治市では、現在、「源氏物語のまちづくり」をテーマに総合的な街づくり事業に取り組んでいます。これは、源氏物語宇治十帖という平安時代を代表する古典文学のイメージに、平等院や宇治上神社の世界遺産や、宇治市街遺跡や白川金色院などの遺跡の持つ歴史性を託したものと言えるでしょう。

このような流れの中で、近年の宇治市内の発掘調査では、宇治市街遺跡や浄妙寺など、平安時代の遺跡が多く脚光を浴びていますが、それ以外の遺跡でも重要な遺跡があります。今回行われた広野廃寺もそのひとつであります。

広野廃寺は、昭和18年にはその存在が知られていたものの、その後周辺の急激な開発が進展し、市内の古代寺院の中でも最も内容がわかっていない寺院であります。今回の発掘調査は、ごく小規模のものでありますが、研究の一助となれば幸いです。

末筆になりましたが、発掘調査の実施にあたって、ご理解とご協力をいただいた関係各位に心より感謝の意を表します。

平成18年3月

宇治市教育委員会
教育長 石田 肇

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に伴う広野廃寺試掘調査報告書である。
2. 本書は宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書の第61集にあたる。
3. 本書で使用する座標は、日本測地系を用いた。
4. 本書に収録する遺物写真は、寿福写房（寿福 滋）に委託した。
5. 本書の執筆は、荒川 史が行った。
6. 本書の編集は、宇治市歴史資料館文化財保護係が担当し、実務を荒川 史が行った。

本 文 目 次

1 調査に至る経過と調査経過	1
2 歴史的・地理的環境と過去の調査	4
3 検出遺構	6
4 出土遺物	7
5 総括	8

挿 図 目 次

第1図 発掘調査実施範囲と開発計画	2
第2図 発掘調査の状況	3
第3図 瓦の採集地点と発掘調査地の位置	8

1 調査に至る経過と調査経過

A 本書の目的

本発掘調査報告書は、宇治市広野町東裏109番1、109番7の一部で計画された、共同住宅建設に先立ち、宇治市教育委員会が実施した試掘調査の内容と成果を報告するものである。

B 埋蔵文化財発掘の届出と調査に至る経過

平成16年11月2日付で和田愛子より、広野廃寺の範囲内にある上記の地番内において鉄筋コンクリート3階建ての共同住宅建設を行う旨の埋蔵文化財発掘の届出書が提出された。これによれば基礎掘削は80cmという設計であった。当該地付近では、平成2年度に南側に隣接する広野町東裏110番1で発掘調査を行っており、その成果によれば当該地に最も近い地点での遺構面は地表下約1.6mで、基礎は遺構面に届かない可能性が高いものと考えられた。

このため遺構の埋没深度を確認するための試掘調査を実施することとし、調査は国庫補助事業として実施することとした。

C 発掘調査

調査前の調査地は、数戸の木造平屋建ての家屋があり、2つの区画に分けられていた。東半部は、西半部に比べ約1m低く窪地状になっていた。調査時にはこの状態で調査を実施したが、建築の際には東側の道路面まで盛土される計画であり、西半部においても若干の盛土が行われるとのことであった。

調査は、最も深い基礎の入る建物の東辺と西辺に、幅2m、長さ15mのトレンチ2本を設定した。調査は3月10日にトレンチ設定を行い、翌11日から原因者から提供された重機により重機掘削を行った。

掘削は西側のトレンチ（1トレンチ）から行ったが、遺構面までの深さが約1.6mであり、安全確保と排土搬出用にトレンチ北端部はスロープにしたため、調査の実効面積は当初予定よりやや減ることとなった。1トレンチでは瓦溜りを検出したが、基壇等の遺構は検出しなかった。

東側の2トレンチでは、表土下約1mで地山面を検出したが、顕著な遺構・遺物は検出しなかった。

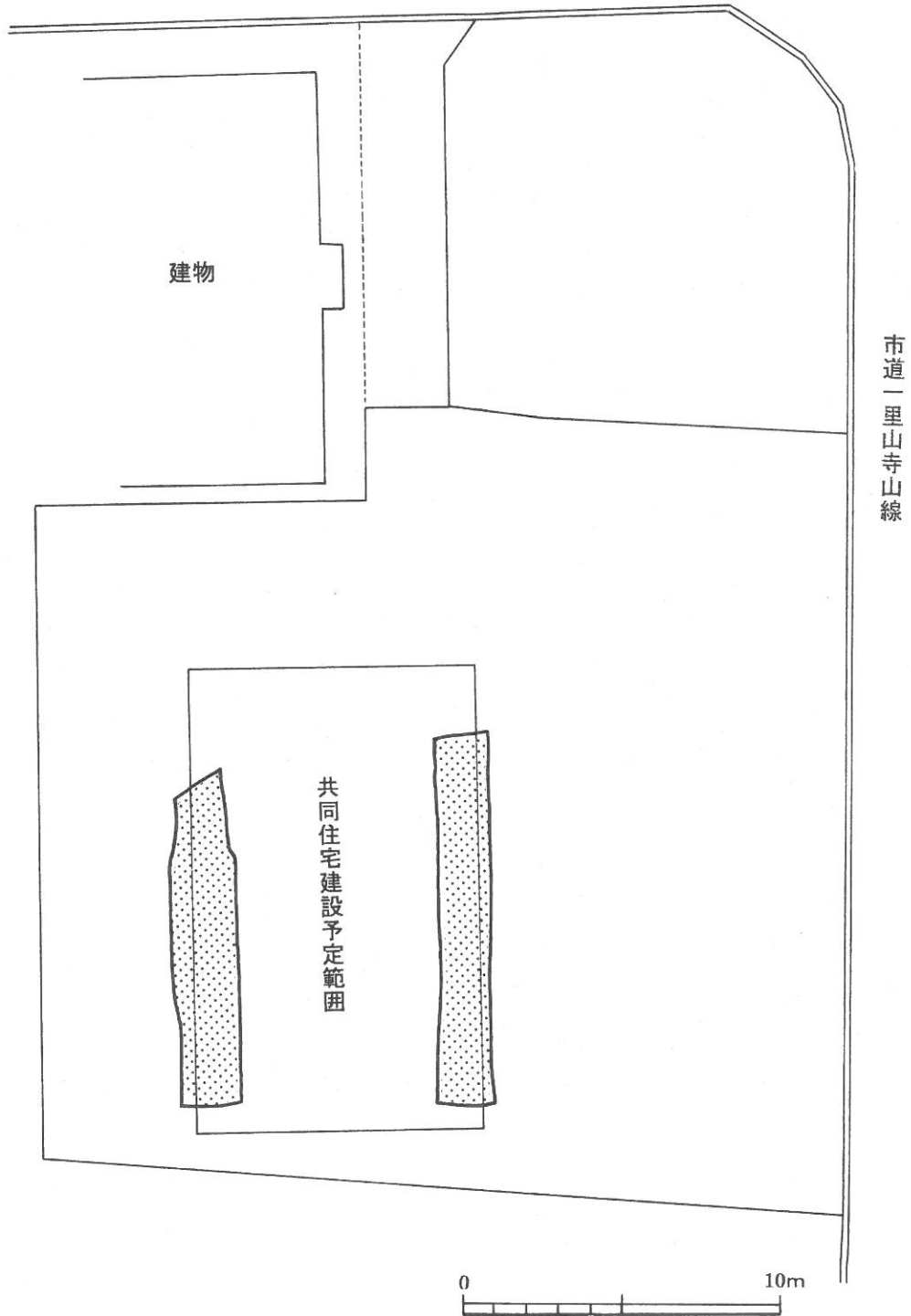
3月28日に全体写真を撮影し、翌29日に平面図・土層断面図の測量を行い、現地作業を終了した。なお、基準・水準は、主要地方道新宇治淀線建設に伴い宇治市建設部が広野公民館周辺に設置した測量点（3級）を利用した。

D 調査終了後の措置

調査の結果、遺跡の埋没深度が現地表面から約1.6mであり、工事はさらに盛土した上で80cmの掘



主要地方道宇治淀線



第1図 発掘調査実施範囲と開発計画

削を行うため、遺構面は保護されると判断された。このため本調査をもって調査は終了することとし、工事が実施された。

E 発掘調査組織

発掘調査組織は以下のとおりである。

発掘調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	谷口道夫
			(平成17年10月11日まで)
		同	石田 肇
			(平成17年10月12日から)
発掘調査事務局	宇治市歴史資料館	館長	吉水利明
	同	文化財保護係長	杉本 宏
発掘調査担当	宇治市歴史資料館	文化財保護係 主任	荒川 史
		主事	浜中邦弘
発掘調査参加者	大原瞳、北澤英子、久保千恵子、志村みどり、棚田祐子		



第2図 発掘調査の状況

2 歴史的・地理的環境と過去の調査

A 地理的環境

広野廃寺のある宇治市広野町は、宇治市の南西部に位置し、南は城陽市に接する。旧郡では久世郡に属する。

この久世郡域に属する宇治市から城陽市にかけての地域には、大阪層群を基盤とする宇治丘陵がある。この宇治丘陵は西に向かって傾斜しており、西部では木津川が形成する沖積地が覆っている。丘陵が沖積地に接する部分では段丘層が大阪層群を覆う。広野町の範囲は、宇治丘陵から沖積地にかけて広がっている。

この宇治丘陵には、小河川が北や西に向かって流下し、谷地形を形成しており、また低位段丘上や一部沖積地に扇状地を形成している。広野町では三軒家川や名木川がこれにあたり、丘陵端部や扇状地上に遺跡が集中している。

B 歴史的環境

現時点で広野周辺では、弥生時代以前の遺跡は確認されていない。しかし視野を宇治丘陵全体に広げると、旧石器の出土した芝ヶ原遺跡や、縄文時代の森山遺跡・芝山遺跡など城陽市域において縄文時代以前の遺跡が知られている。また近年沖積地の調査も増加しつつあり、久御山町の佐山尼垣内遺跡でも縄文時代晩期の土器が出土し、佐山遺跡・市田斎当坊遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落が発見されている。沖積地については、これまで調査が及んでおらず、不明な状態であったが、今後新たな遺跡が発見される可能性が高いものと思われる。

広野地域で注目されるのは、丘陵上に位置する古墳群である。前期に属する一本松古墳にはじまり、一里山古墳・庵寺山古墳・金毘羅山古墳・坊主山古墳群と、古墳時代を通して大型円墳や前方後円墳が築造され、ひとつの首長墓の系列を示している。これらの古墳は、京都府下最大の久津川車塚古墳を含む、久津川古墳群中の一支群と捉えられている。

集落では、名木川の最上流部で、古墳時代前期の八軒屋谷遺跡があるが、詳細な調査を待たずに消滅した。このほか、広野廃寺の北に隣接する一里山遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居が確認されている。7世紀に入ると広野廃寺下層（広野遺跡）や、旦椋遺跡などの集落が知られる。

C 広野廃寺の過去の調査

広野廃寺は、三軒家川と名木川が開析した谷に位置する。三軒家川に比べ名木川の下刻作用が大きいため、谷は南側が低くなり、北側は南に傾斜する緩斜面となっている。寺域はこの谷の北側緩斜面にある。

広野廃寺の発見は、昭和18年に宇佐晋一氏によって瓦が採集されたことによる。その後昭和29年頃、

主要地方道宇治淀線の舗装工事の際に、広野町東裏付近で多量の瓦が出土し、古代寺院の存在が確実となった。

広野廃寺の発掘調査は、これまで3回行われている。第1次調査は、昭和42年に山田良三氏によって広野町東裏109-4の地点で行われた。この調査では、調査地がすでに攪乱を受けており、遺構は検出していない。第2次調査は、昭和46年に『宇治市史』編纂に伴い、山田良三氏により実施された。(第3図F) この調査では柱穴群とともに軒丸瓦が出土し、川原寺式の軒丸瓦を創建瓦とすることが明らかになった。

第1・2次調査はいずれもグリッド調査であるため、遺構の性格を明らかにできるものではなかったが、平成2年度に行った第3次調査は、第2次調査と同じ敷地内において約400㎡のトレンチ調査を行った。(第3図G) この調査では、中心伽藍は確認できなかったものの、築地側溝と考えられる溝や掘立柱建物、井戸などの遺構を検出し、その結果、寺域の西限を明らかにした。また、井戸からは多量の土器類・瓦類が、井戸廃絶時に投棄された状態で出土した。出土した土器には、水瓶や鉄鉢形土器、円面硯、墨書土器などがあり寺院で使用される土器群の様相を示している。この井戸が築地の外側にあったことから、寺域の西に僧坊などの施設があったことが推測された。そして大まかな寺域の推定が可能になった。

これら3回の発掘調査が行われたが、中心伽藍についてはいずれの調査においても検出しておらず、正確な位置や配置についても不明である。第3次調査の前年、付近に在住していた栗野謨氏が「宇治市広野廃寺発見の事情」で広野廃寺周辺の瓦の出土状況について報告されている。これによれば、第3図A～C、Eの地点で瓦が採集されている。またDの地点は、道路工事の残土が廃棄され、この土に瓦が含まれていたという。これらの瓦の出土状況と発掘調査の成果を合わせて推測すると、宇治淀線付近から第3次調査地までの間に中心伽藍が存在するものと思われる。ただCやEの地点が、推定される寺域より西に外れることになるが、平成2年度の調査では、西側に寺域外の関連施設が想定されることから、この部分での瓦の出土は問題ないものと思われる。今回の調査地(第3図H)は、第3次調査地と宇治淀線の間にあたり、第3次調査で推測した寺域の東部にあたる。

3 検出遺構

A 層序

調査地の基本的な層序は、下層から基盤層・包含層・旧表土・現代盛土となる。基盤層は、黄褐色系の粘質土や砂質土からなる。大阪層群に由来する土が再堆積したものか、もしくは整地層と思われる。平成2年度の調査においても、本調査地に近いトレンチ東部では、トレンチ中央部より地山が低くなる状況が見られ、調査地東方を流れる三軒家川が形成した谷が存在することが予想された。今回の調査地においても同様の状況を示しているものと思われる。

包含層は、褐色系の砂質土や粘質土である。1トレンチでは瓦や土器類が出土しているが、2トレンチではまったく遺物は出土していない。

旧表土については、近代以後のものと思われる。明治33年の地籍図によれば、調査地は畑地となっており、この段階に形成されたものと思われる。現代の盛土については、1トレンチでは盛土が多く、少なくとも2回にわたって行われており、層厚は0.8～1mを測る。昭和42年の都市計画図によれば、調査前に建っていた建物が描かれており、戦後からこの間に盛土されたものであろう。

B 検出遺構

今回調査した1・2トレンチのうち、遺構を検出したのは1トレンチのみである。2トレンチにおいては、遺物もほとんど出土しておらず、1トレンチに比べ2トレンチが主要な建物などから離れていることを示しているものと思われる。1トレンチでは、瓦溜り・溝・土壙・ピットを検出しているが、調査面積が狭小のため性格を特定できるものは少ない。また遺構に伴うものではないが、トレンチ南端の包含層で瓦がまとまって出土している。ここからは軒瓦も出土している。

瓦溜り トレンチのほぼ中央部、後述する溝の上層で検出した。今回の調査における出土遺物の大部分が、ここから出土した瓦である。軒瓦はまったく含まれておらず、平瓦と丸瓦のみであった。2次的に火を受けているものがあり、火災などにより不要になった瓦を廃棄したものである可能性が考えられる。

溝SD02 瓦溜りの下層にある溝で、L字形に屈曲する。検出長約2.6m、幅約0.55m、深さ約0.05m。

土壙SK01 トレンチ南端で検出した。南半部はトレンチ外にのびており、北半部のみを検出した。直径約1m、深さ0.7mを測る。

ピット ピットは6基検出している。直径45cm～60cm、深さ20cm～37cmを測る。検出した範囲内では規則性は見られず、建物等にはならないものと思われる。

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱30箱分になるが、その大部分が1トレンチの瓦溜りから出土した瓦類である。そのほかには、須恵器・土師器の土器類も若干出土しており、遺物の時期は古墳時代後期から奈良時代にかけてのものである。

A. 土器（第3図、写真図版5-1）

土器は6点を図示した。土器は他にも小片があるが、量としては多いものではない。1・2は須恵器の杯Aの身である。1は口径11.6cm、器高3.2cm、2は口径13.3cm、器高4cmを測る。いずれも瓦溜りからの出土。3は須恵器の皿である。底部からほぼ垂直に立ち上がる体部を持ち、口縁は横方向に屈曲する。口径10.4cm、器高2.4cmを測る。瓦溜りからの出土。4は黒色土器A類の皿である。口径14cm、器高2.7cm。瓦溜りからの出土。5・6は須恵器の杯Hの蓋と身である。広野廃寺創建以前の遺物であるが、平成2年度の調査では、この時期の竪穴住居を検出しており、寺院創建以前には寺域に集落が展開していたことがわかっている。これらの遺物はこの集落に由来するものであろう。

B. 瓦（第3図～第6図、写真図版5-2～6）

軒瓦 軒瓦は全部で5点出土している。このうち軒丸瓦は3点、軒平瓦は2点である。軒丸瓦はいずれも同じ形式のもので、広野廃寺の創建瓦と考えられている川原寺式系のものである。複弁八弁蓮華文を主文とするもので、やや突出した中房に1+8の蓮子を配する。外縁は緩やかな三角縁となっており、正位置と逆位置とが交互に配される鋸歯文が巡る。また主文と外縁との間に、一条の圈線を施す。

軒平瓦は、いずれも同じ形式のもので、これまで広野廃寺の調査や周辺での採集遺物の中でも確認されていないものである。平城宮6664系で、付近では城陽市の平川廃寺、加茂町の恭仁宮に類例がある。小片のため同範関係は不明である。

丸瓦 丸瓦は、すべて行基式丸瓦である。格子叩きのA類と縄叩きのB類の2種に分けられる。A類は基本的には叩きの後叩きの痕跡をナデ消すが、一部叩きの痕跡が残るものがある。また叩きは格子の大きさによって、大・中・小の3種に分けられる。創建時使用瓦と考えられる。

平瓦 平瓦も丸瓦同様、格子叩きのA類と縄叩きのB類とがある。格子の大きさも、丸瓦同様大・中・小の3種類がある。桶の痕跡が認められる個体があり、桶巻作りであることがわかる。また両側面にそって、浅い凹線が認められる個体があり、これが分割時の目安となる分割界線と考えられる。

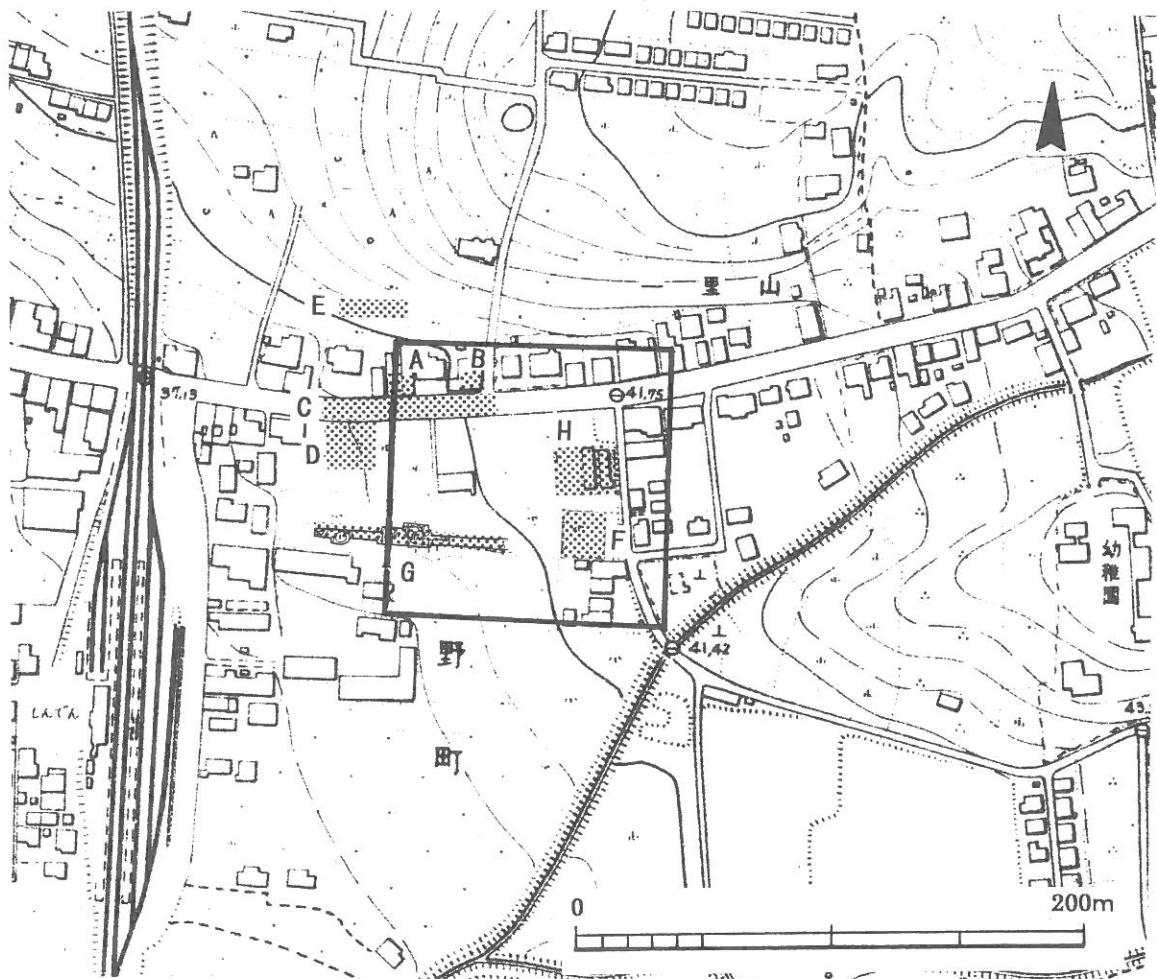
平瓦B類は、長軸に並行する条痕をもち、叩きの後は調整を施していない。一枚作りによるものだろう。奈良時代の補修時に使用されたものか。

5 総括

今回の調査では、主要伽藍に関わる遺構は検出しなかったが、1トレンチにおいて瓦溜りを検出した。そして、2トレンチではほとんど遺構・遺物を検出しなかった。このことは、2トレンチの地点が、調査前には1トレンチの地点より1段低く、攪乱を受けやすい状態であったことを考慮しても、伽藍位置の復元に大きな手掛かりを与えるものと思われる。

昭和35年に作成された宇治市都市計画図を見ると、調査地北側の丘陵斜面は、主要地方道宇治淀線の間近まで迫っており、道路際の家一列分ほどしか平坦面は認められない。一方、道路の南側では標高40mの等高線がほぼ真南に一旦下がり、平成2年度調査地付近からわずかに東方に屈曲する。地形図の状況から判断すると、丘陵と三軒家川の谷の間に平坦面が広がっていたことが読み取れる。この平坦面に広野廃寺が営まれたものと思われる。

そこで平成2年度に検出した築地側溝を西限とし、また丘陵の傾斜変換点を北限として仮に一町四方で寺域を復元すると、ほぼ地形図で読み取れる平坦面と一致することがわかる。もっとも東限につ



第3図 瓦の採集地点と発掘調査地の位置

いては三軒家川にかなり近づくため、東西は一町より小さくなるかもしれない。伽藍配置については、久世郡寺院の多くが法隆寺式もしくは法起寺式であることから、広野廃寺も同様の伽藍配置であると仮定すると、今回の調査地の西側に主要伽藍がある可能性が高いものと考えられる。

今回の調査で出土した遺物では、軒平瓦で新形式の瓦が出土した。この瓦は平川廃寺に類例があるが、小片のため同範関係などは不明であり、供給元などを明らかにすることはできない。その他の遺物については、これまでの調査の知見から大きく逸脱するものはない。

今回の調査はあくまで試掘調査であり、調査面積も小規模なものであることから、得られた知見は多いものとは言えないが、広野廃寺の主要伽藍をより絞り込むことができたものと言える。

<参考文献>

- 古代学研究会「山城八軒屋谷土師遺跡調査報告」『古代学研究』34 1964
 京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』 1967
 宇治市『宇治市史』第1巻 1973
 鐘方正樹「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」『京都考古』41 1985
 栗野謨「宇治市「広野廃寺」発見の事情」『京都考古』56 1989
 宇治市教育委員会「広野廃寺平成2年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第17集
 1991
 荒川史・魚津知克・内田真雄「京都府宇治市庵寺山古墳の発掘調査」『古代』105 1998
 城陽市『城陽市史』第3巻 1999
 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「佐山尼垣内遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第31冊
 2001
 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「佐山遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第33冊 2003
 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「市田齊当坊遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第36冊
 2004

遺構別出土丸瓦型式一覧表

	1トレンチ重機掘削中	1トレンチ瓦溜り	1トレンチ南端	合計
ナデ消し(格子不明)	3	5	2	10
格子叩大	1		1	2
格子叩中	1	1		2
格子叩小	2	1		3
縄叩き	1	2	1	4
調整不明	2	2	2	6
合計	10	11	6	27

遺構別出土平瓦型式一覧表

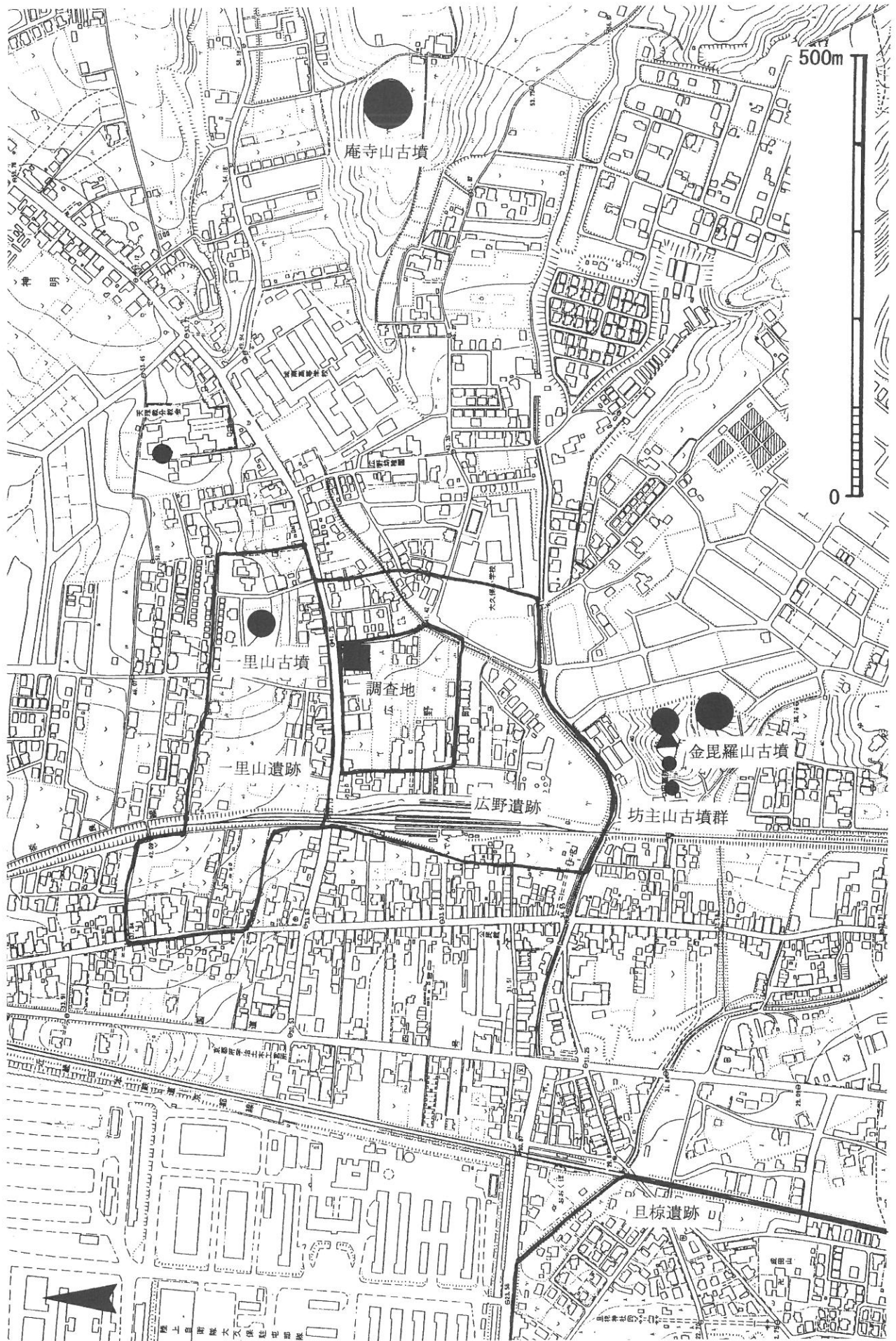
	1トレンチ重機掘削中	1トレンチ瓦溜り	1トレンチ南端	合計
ナデ消し(格子不明)	1	3	2	6
格子叩大	2	4	1	7
格子叩中	3	8	2	13
格子叩小	2	7	2	11
縄叩き	3	2	1	6
調整不明	2	4	2	8
合計	13	28	10	51

報告書掲載遺物一覧表

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	出土遺構	地区	残存率
1	3	5-1	須恵器	杯身	瓦溜り	1トレンチ	100%
2	3	5-1	須恵器	杯身	瓦溜り	1トレンチ	50%
3	3	5-1	須恵器	杯身	瓦溜り	1トレンチ	20%
4	3	5-1	土師器	皿	瓦溜り	1トレンチ	50%
5	3	5-1	須恵器	杯身	排土中	1トレンチ	60%
6	3	5-1	須恵器	杯蓋	瓦溜り	1トレンチ	30%
7	3	5-2	瓦	軒丸瓦	南端包含層	1トレンチ	
8	3	5-2	瓦	軒丸瓦	重機掘削中	1トレンチ	
		5-2	瓦	軒丸瓦	南端包含層	1トレンチ	
9	3	5-2	瓦	軒平瓦	重機掘削中	1トレンチ	
10	3	5-2	瓦	軒平瓦	南端包含層	1トレンチ	
11	3	6-1	瓦	丸瓦	瓦溜り	1トレンチ	
12	4	6-1	瓦	丸瓦	瓦溜り	1トレンチ	
13	4		瓦	丸瓦	瓦溜り	1トレンチ	
14	4	6-1	瓦	丸瓦	瓦溜り	1トレンチ	
15	5	6-2	瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
16	5		瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
17	5	6-2	瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
18	5	6-2	瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
19	6	6-2	瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
20	6		瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
21	6		瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
22	6		瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
23	6		瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	
24	6	6-2	瓦	平瓦	瓦溜り	1トレンチ	

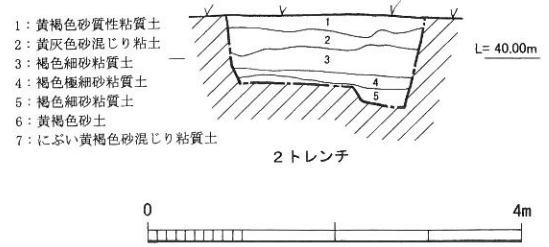
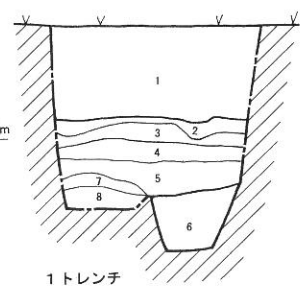
圖面圖版

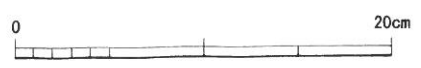
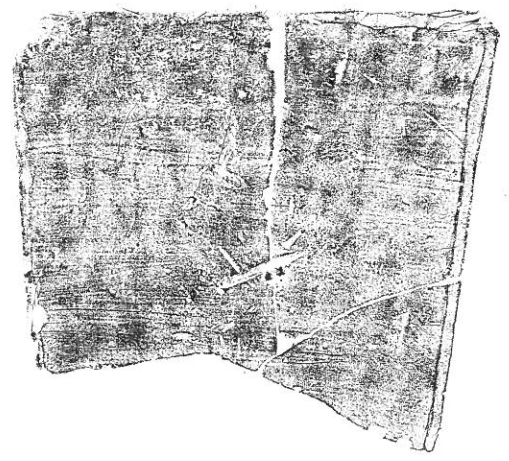
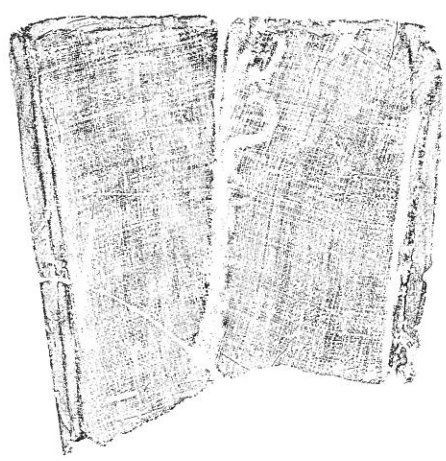
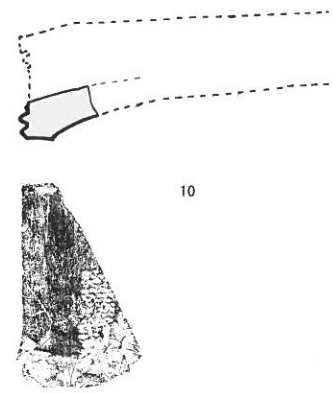
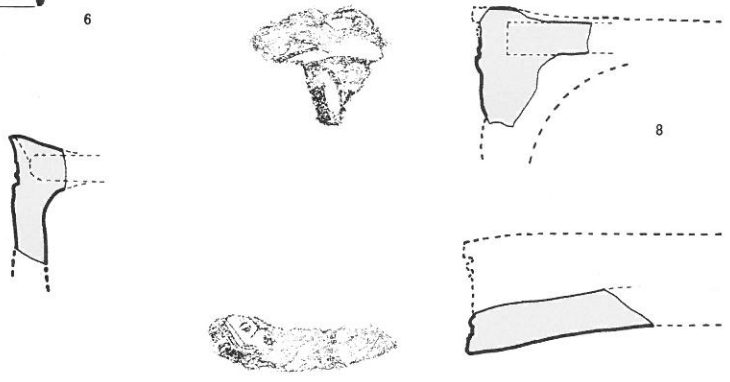
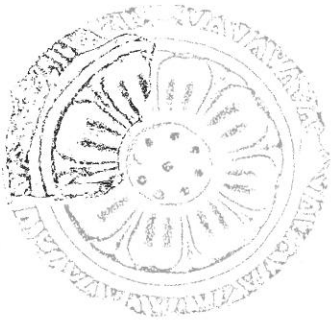
図版1 調査地の位置と周辺の地形





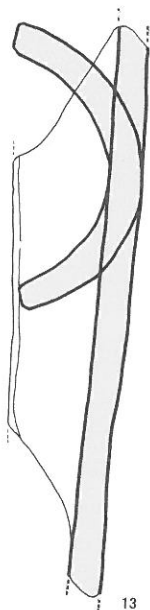
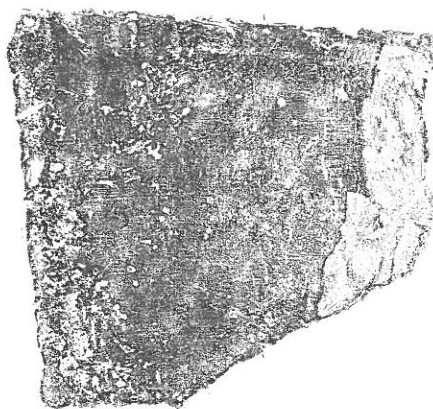
- 1: 暗赤褐色砂混じり粘土・黄褐色砂
- 2: 黄灰色砂混じり粘土
- 3: 褐色細砂混じり粘土
- 4: にぶい黄褐色砂混じり粘土
- 5: にぶい黄褐色砂質土 (遺物・炭化物含む)
- 6: にぶい黄褐色砂質土
- 7: 褐色砂質性粘質土
- 8: 明褐色砂質土
- 9: 褐色砂質土
- 10: にぶい黄褐色砂質性粘質土
- 11: 暗褐色極細砂粘質土
- 12: 暗褐色砂質土
- 13: 細砂粘質土
- 14: にぶい黄褐色砂質性粘質土
- 15: 暗褐色砂質性粘質土
- 16: にぶい褐色砂質土



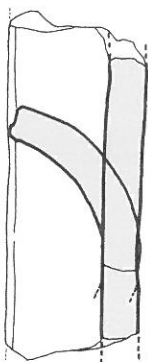




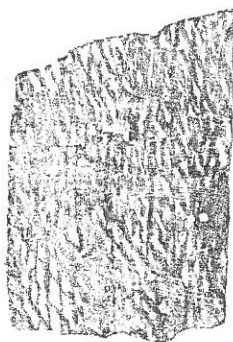
12

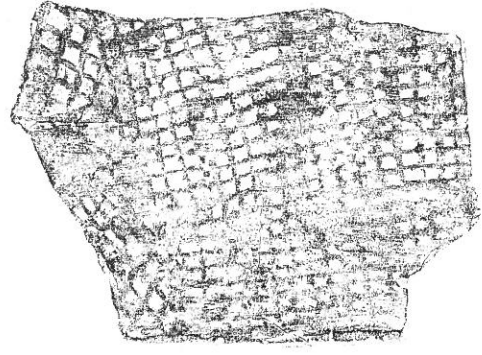
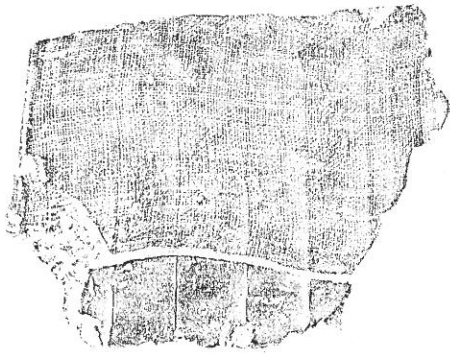


13

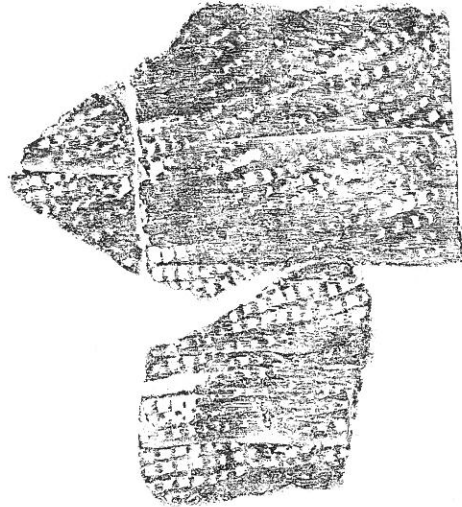
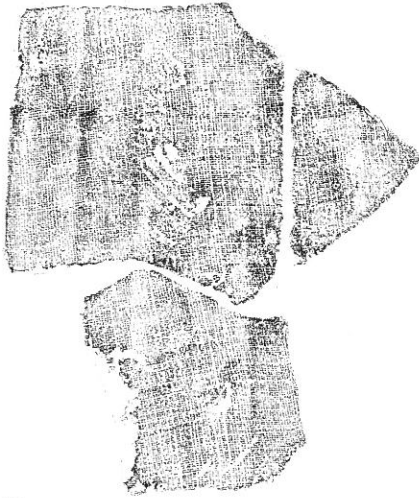


14

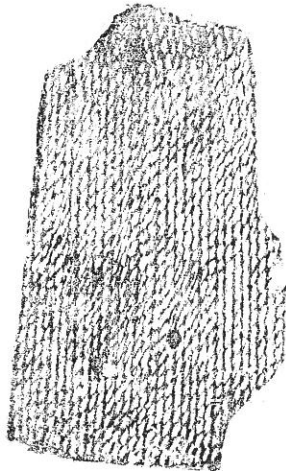




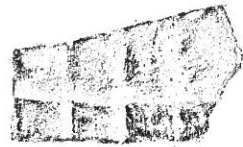
15



16

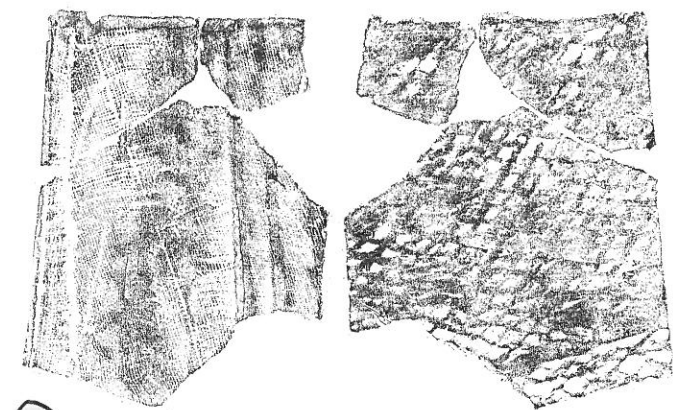


17

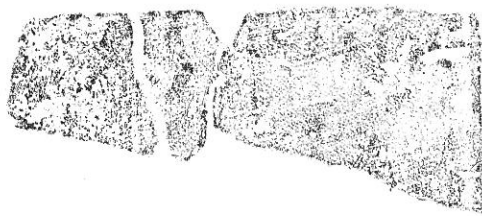


18

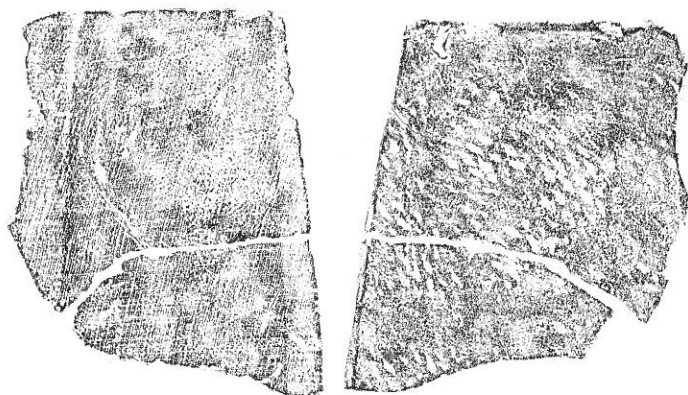
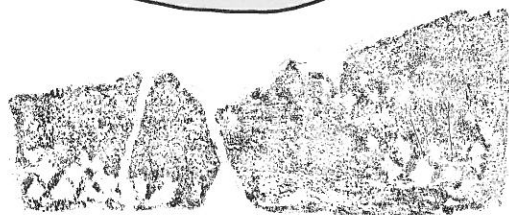




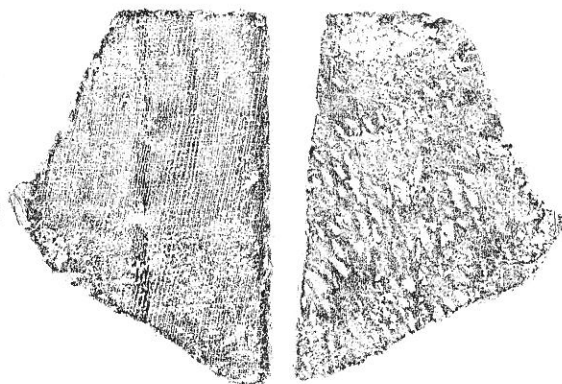
19



20



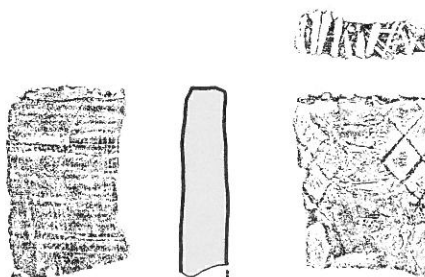
21



22



23



24



写真図版

1. 調査前の状況 (南東から)



2. 1トレンチ瓦溜り (西から)



3. 1トレンチ瓦溜り (南から)



写真図版 2 (遺構)



1. 1 トレンチ全景 (南から)



2. 1 トレンチ全景 (北から)

1. SK01



2. トレンチ中央部ピット



3. SD02



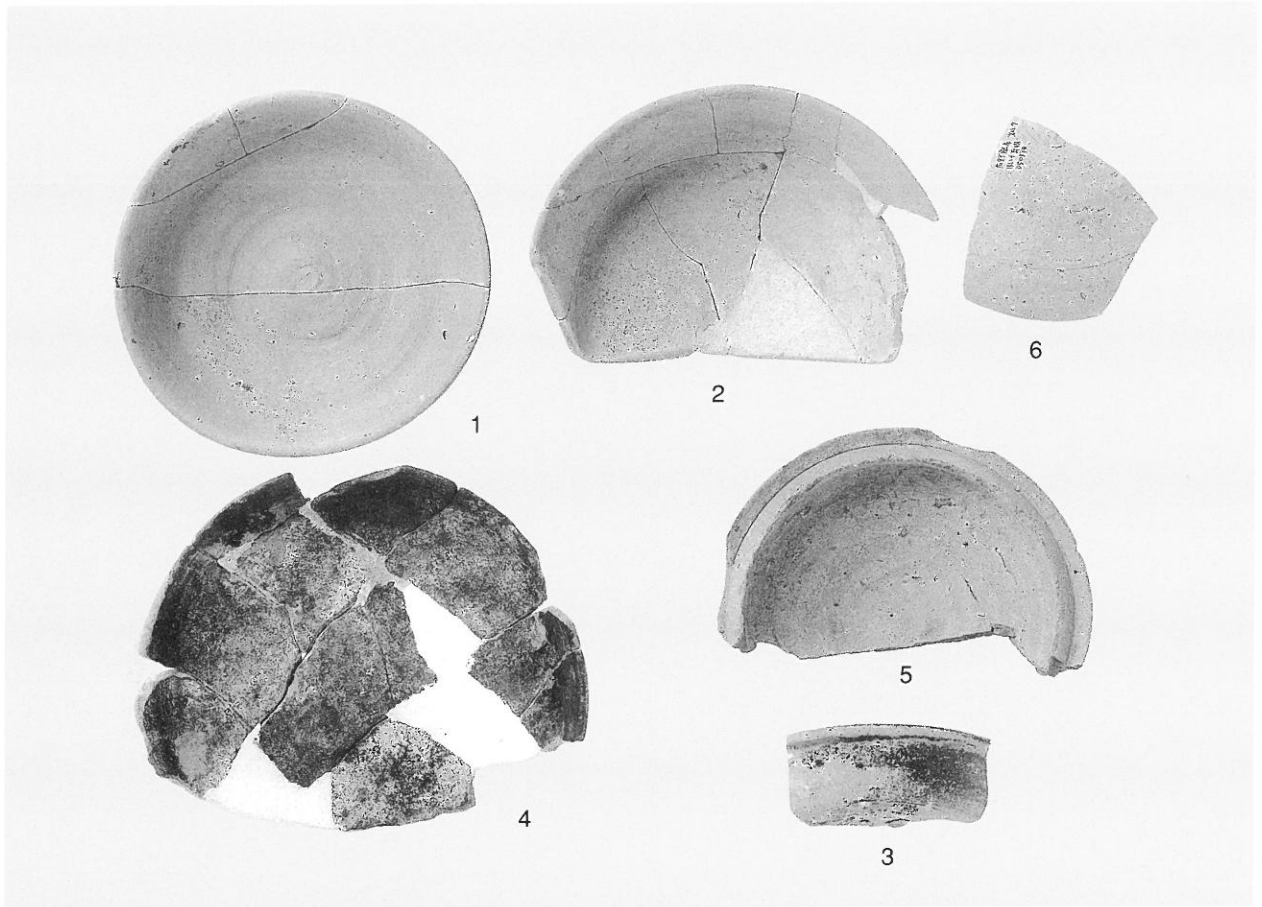
写真図版 4 (遺構)



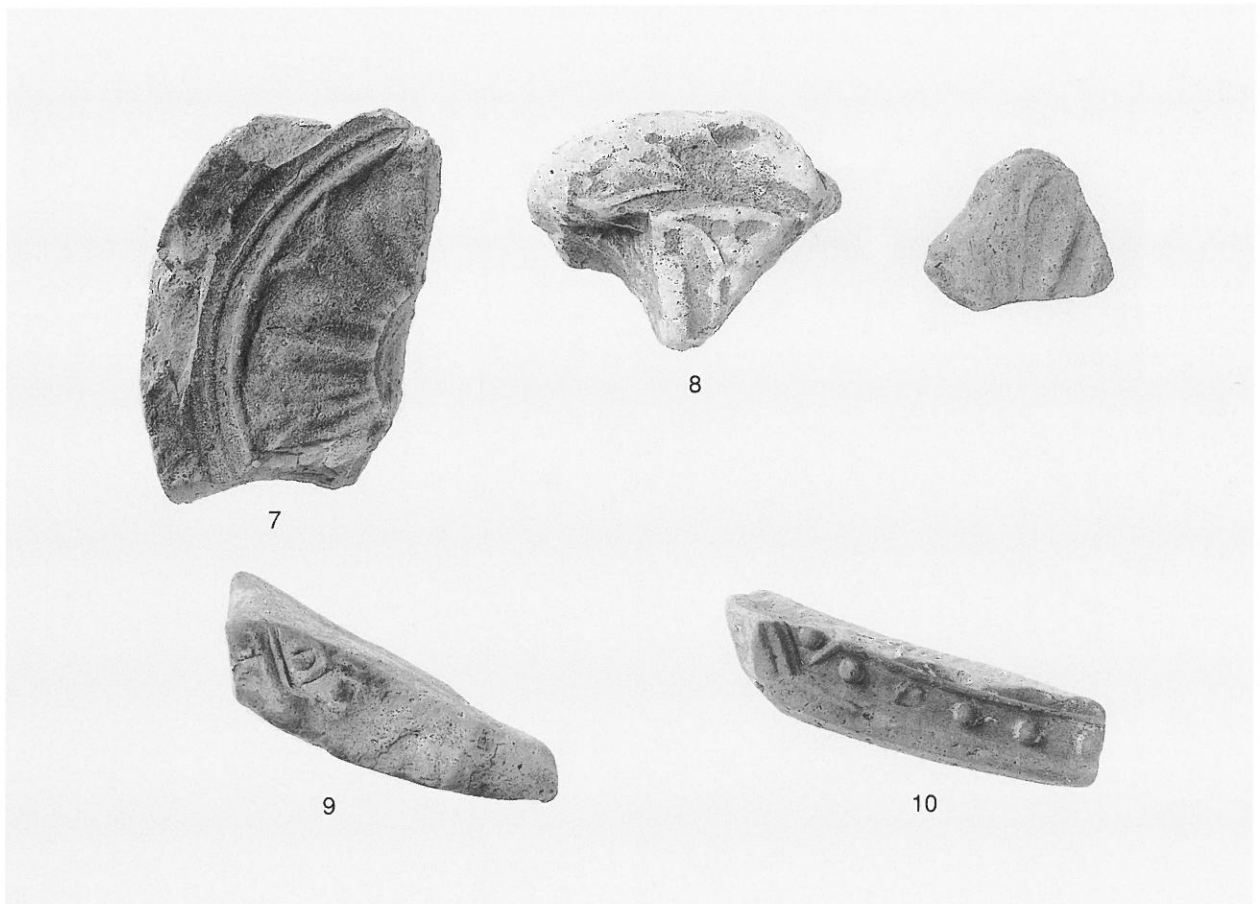
1. 2 トレンチ全景 (南から)



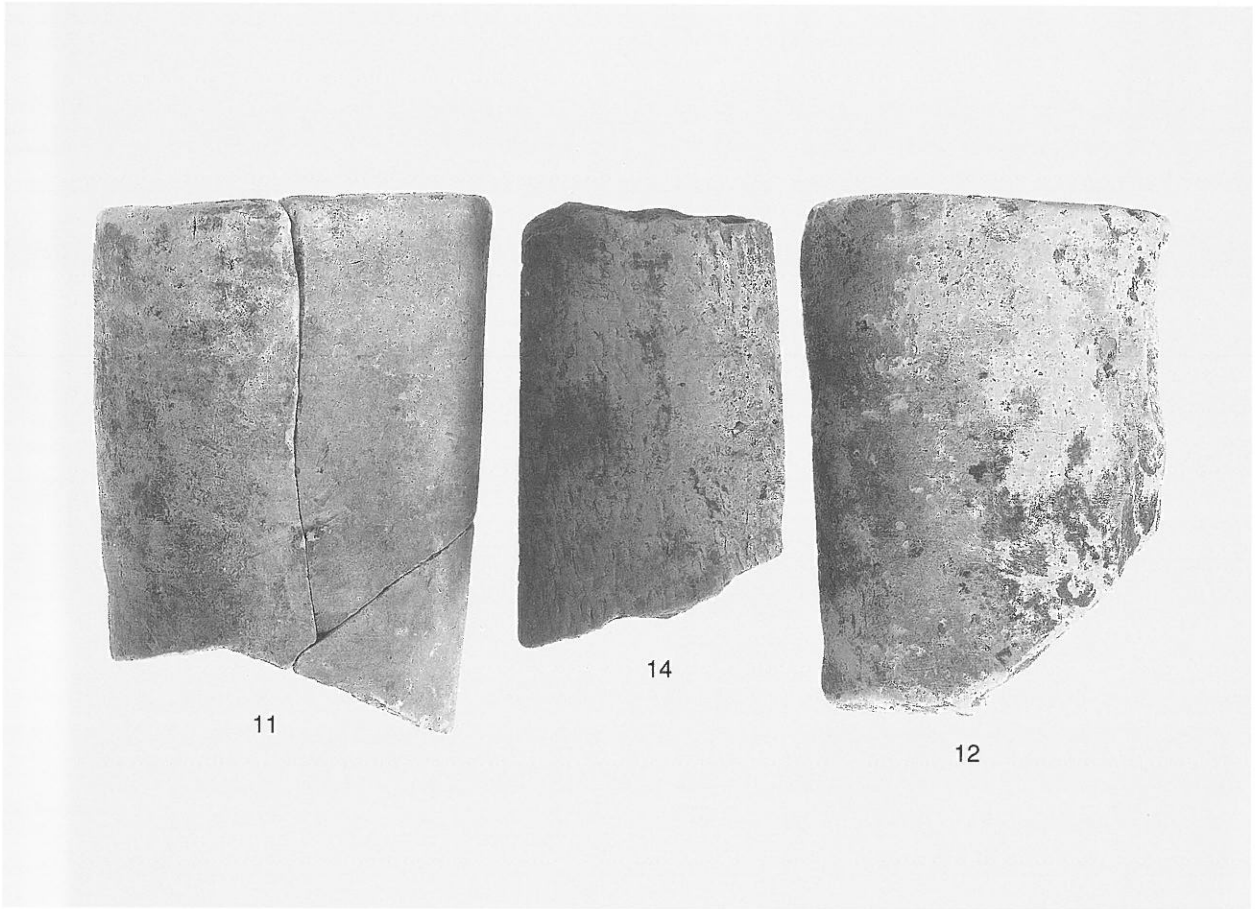
2. 2 トレンチ全景 (北から)



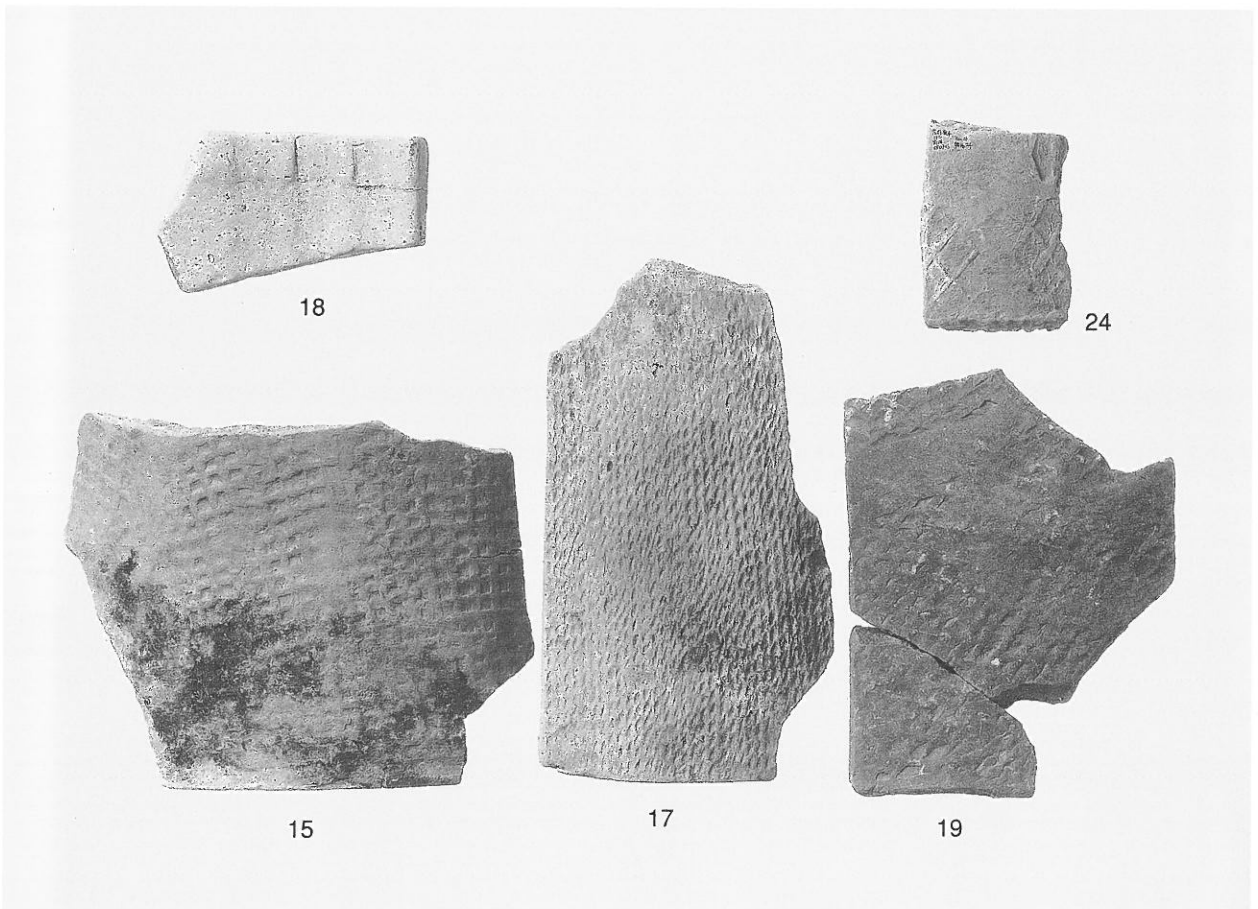
1. 土器類



2. 軒瓦類



1. 丸瓦



2. 平瓦

抄 録

ふりがな	ひろのはいじはくつちょうさほうこくしょ							
書名	広野廃寺発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第61集							
編著者名	荒川 史							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行者	宇治市教育委員会							
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	調査原因
宇治市街遺跡 (川西地区)	宇治市広野町東裏109-1、109-7の一部	26204	16	34° 52′ 42″	135° 46′ 47″	050310 ～ 050329	55㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
広野廃寺	寺院	奈良	土壙・溝・ピット	瓦・土師器・須恵器				
成果要約	<p>広野廃寺は、白鳳時代の寺院であり、過去3次の発掘調査が実施されているが、現在のところ主要伽藍は発見されていない。</p> <p>今回の発掘調査では、瓦溜りや土壙・溝などを検出しているが、主要伽藍につながるような遺構は検出しなかった。</p>							

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第61集

広野廃寺発掘調査報告書

発行日 2006年3月31日

発行者 宇治市教育委員会
〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地

編集 宇治市歴史資料館
〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1
TEL 0774-39-9260
FAX 0774-39-9261
Eメール shiryoukan@city.uji.kyoto.jp

印刷 有限会社 ヤマシロプリンティング
〒611-0014 京都府宇治市明星町2丁目6-97

